

古墳時代並行期の北東北における古墳文化と続縄紋文化の諸相

総合化学研究科 総合文化学専攻
地域文化リノベーションプログラム
G0220001 阿部理絵

古墳時代並行期の東北北部では、西日本に起源を持つ古墳文化と北海道に起源を持つ続縄紋文化が混在していた。古墳文化社会拡大の北限は岩手県胆沢平野とされ、北の地域になるほど続縄紋文化の要素が支配的であるとされてきた。しかし、八戸市田向冷水遺跡は古墳文化の要素を持つ遺跡でありながら、これまで北限とされてきた胆沢平野を北へ大きく越えた位置にある。ある文化領域において異文化の流入が認められた際には、その故地や在地の人びとがどのように異文化を受け入れたのかが重要な問題となるが、それを土器の型式学的な分析から詳細に検討している研究は見られない。そこで、本論文では田向冷水遺跡出土の古墳時代中期から後期初頭の土器と、その比較対象として田向冷水遺跡と同時期で比較的距離が近い中半入遺跡出土土器を分析し、両遺跡間における移民の可能性やそれぞれの遺跡における古墳文化と続縄紋文化の関わりに差異が見られるかを検討する。

それぞれの遺跡から出土した土器について、土師器は器種・器形から、北大Ⅰ式土器は器種・器形と紋様から分類を行った。その結果、田向冷水遺跡の坏は球胴で口辺部が直行する器形の物が主体となっているのに対し、中半入遺跡では頸部にくびれを持ち、口辺部が外反する器形のものが主体的であることが明らかになった。また、田向冷水遺跡では高坏の出土は見られないが、中半入遺跡では高坏が出土しているという違いも見られる。さらに、両遺跡の遺構で器種構成が一致するものはなく、器面調整など製作技法の細部まで一致する土師器は見られなかった。また、両遺跡の北大Ⅰ式土器の出土点数と土師器の出土点数の比率を見ると、中半入遺跡は田向冷水遺跡よりも圧倒的に北大Ⅰ式土器の出土率が低いという結果になった。

これらの分析結果から、田向冷水遺跡出土土器の故地を中半入遺跡に求めることは難しく、両遺跡間における移民の可能性は低いものと考えられる。両遺跡間における移民の可能性を完全に否定することはできないが、大規模な移民が流入してきたという可能性はきわめて低いと考えられる。また、中半入遺跡の方が北大Ⅰ式土器の出土率が低いことについては、北部の地域ほど続縄紋文化の要素が強いという先行研究の妥当性を示すものだが、明確な根拠とすることはできない。これまでの研究には、田向冷水遺跡を古墳文化集団と続縄紋文化集団が協働しながら形成していた集落とする見方があるが、今回の結果から古墳文化の生活様式で暮らす人びとを古墳文化集団、続縄紋文化の生活様式で暮らす人びとを続縄紋文化集団と安易に定義づけることには問題があると考えられる。在地の人びとが

どのように異文化を受け入れていったのかについて、より広範囲での土器の比較が必要である。